

目的 前報(家政学雑誌 vol. 29, 387 (1978) など)において、市販樹脂加工布について使用樹脂剤と遊離HCHO量との年次ごとの変遷について報告した。樹脂加工の主目的である防しわ性に関してどのような傾向にあるのか、特に昭和50年10月のHCHO規制前後に着目して、使用樹脂剤、遊離HCHO量の動向と防しわ性のそれとの関連性について検討した。耐洗たく性についても検討を行なった。

方法 試料布は既報と同様の方法で購入した。防しわ性には織物組織、糸の形態などの要因が大きく影響すると考えられるので、綿においてはブロード糸のもの、再生セルロース繊維では主として裏地として使用されている平織布を試料布とした。防しわ性の測定は、JIS L1041に従い、洗たくは既報通り、残留樹脂量はホルスベクトル測定により行なった。

結果 防しわ性に関しては、綿の場合、防しわ度(W+F)のピークは、HCHO規制以後も以前と同様、乾防しわでは $130^{\circ}\sim 140^{\circ}$ 、湿防しわでは $160^{\circ}\sim 170^{\circ}$ にあったが、以前は 200° 以上という高い防しわ度のものもかなりみられたのに対し、以後は全くみられない。一方、再生セルロース繊維については、乾湿防しわ度とも、規制以前は $180^{\circ}\sim 220^{\circ}$ と狭い範囲に集中するのに対し、規制以後は著しいピークがみられず、 $160^{\circ}\sim 230^{\circ}$ と広い範囲に分散するものが特徴である。規制以来、使用樹脂剤の主流は尿素系、メラミン系から、グリオキゲール系、特に非及び低ホルマリン系に移り、遊離HCHO量も大巾に減少したが、防しわ性に関しても同様で、乾湿防しわ度は、平均値で $10^{\circ}\sim 20^{\circ}$ 低い傾向がみられた。耐洗たく性に関しても、規制後は低くなり、グリオキゲール系を再生セルロース繊維に用いる傾向の反映が大きいと考えられる。